

名 称	合志市ボランティアセンター
所 在 地	〒861-1102 熊本県合志市須屋2251-1 合志市社会福祉協議会内
連 絡 先	TEL : 096-242-7000 FAX : 096-242-6635 URL : http://www.koshi-shakyo.or.jp/

地域の現況・特色

活動対象地域の人口 合志市 53,450人(平成19年3月末現在)

合志市は、県都熊本市の北東部に位置し、平成18年2月に合志町、西合志町の2町が合併し生まれた新しい市である。総面積は53.17km²(東西約12km、南北約8km)である。

北部地域は阿蘇の火山灰が降り積んだ黒ボクと呼ばれる火山灰性腐植土に覆われた広大な農地が広がり、県内有数の穀倉地帯となっている。

住宅地と商業地は、以前から国道・県道や熊本電鉄沿線に形成され、熊本市に隣接した南西部一帯に新市街地を形成している。

事業の名称、活動概要

名称 中・高校生の居場所づくり事業

ボランティアやまちづくり活動またはそれに伴う体験・研修・交流活動を通して、

- ①中学生・高校生がほっとできる場所や居場所づくり
 - ②中学生・高校生が企画・自ら発信する場
 - ③中学生・高校生が地域の方や家族と関わり、生き合うことを促す場
- としての活動を主な目的としている。

事業の実施に至る背景、連携・協働のねらい

地域福祉の拠点である総合保健福祉センターが平成14年度に開館。赤ちゃんから高齢者の方まで多くの異世代の方が交流利用をされるようになり、小学生だった子が中学生・高校生になってきた。利用者の方が成長したり、ライフスタイルが変わっても、それぞれ

の発達段階に合わせた“遊び”や出会い参加ができ、その命の流れが循環して、いずれ“支え支えられる”関係が地域でできればという思いと、昨今の中・高校生を取り巻く社会状況を危惧して、中・高校生と地域との関わりが必要と感じた。

そのため、当事者である中・高校生のボランティアグループ、赤ちゃん触れ合い体験に協力していただく地域の助産師さん、中・高校生と将来の我が子を重ねる子育て中の親子、呼び掛けをしていただく地域のボランティア協力校・教育委員会の理解と協力を仰ぎ、連携・協働を図った。

事業の内容

① 事前準備として行った取組（企画段階）

学校・教育委員会・児童館に遊びに来た子どもたち（体験学習・職場体験含む）、友だちからの発信によるイモヅル方式、講座・教室を行うなど、まずは思春期の子どもたちが来やすい環境を作ることから始めた。

社会にとっての必要性を再認識するために、中・高校生を取り巻く現在の社会状況の調査を行った。次にこの地域での実際の状況について、センターに遊びに来ていた中・高校生の声を反映したいと考え、子どもたちとの声掛けと信頼関係づくりを行い、現状について聞き取り調査を行った。また、社会福祉協議会が認定する地域のボランティア協力校会議にて、一番子どもたちの顔が見える各学校の先生たちの協力を得るために、子どもたちや社会にとっての必要性と双方にとってのメリット、連携協力体制について話す場を持ち、学校の理解を得た。

② 活動の展開内容（活動段階）

☆きっかけづくり

☆次につながるフォローアップ

例えば託児ボランティアなどへの参加を呼び掛ける

中学生・高校生を核とした一石三～六鳥の取り組みを目指しプラスの感情の波紋をつくる、このときプラスの感情の連鎖になりやすい声掛けをこまめに行う。

☆中学生・高校生が“発信”する！！

例えば赤ちゃん触れ合い交流の経験を積み重ねた子どもたちが、同世代や異世代に向けて、自分たちが様々な人にきっかけづくりをつくる企画を開催する。

自分の中で感じたことを様々な人に発信し、やりとりをし、共有し、フィードバックしていく経験。その話し合いの過程（プロセス）に成長がある、段階に応じた関わりと声掛け、おしゃべりやたわいもない時間を共有しながら、その会話の中に本質的なニーズが潜んでいることがあるので、そのような時間を大切にする。

- 養成講座の実施
- 定期的な集まりや関わり、対話が持てるミーティングの実施、中高校生が考える地域ボランティアの企画運営実施
- 各中学校や高校への協力体制の確立づくり実施
- 実際に心の拠り所となる様々な人や体験と出会う場と場面の実施
- 地域の大人や関わる大人の育成や理解 誤解をされがちな世代への寄り添う心の啓発と醸成実施（中高校生が企画運営するイベント開催 増加する中・高校生のいじめ・自殺に対して、同年代・異年代・親世代と度重ねるミーティング、84才のおばあちゃんが主人公の生の演劇をきっかけにトーク座談会の開催）
- 一人一人の声掛け実施 安心感づくり実施

③ 連携・協働に当たってのポイント・留意点

この事業が愛情をもって成り立つために、

- ① 体験活動ボランティアに興味を持っていても思春期時代はなかなか言い出しにくい（まじめと言われたくないなど）。そのときに学校の先生の理解と協力があれば、『部活のみんなで参加する』『弁当・ケーキがでる』などとの言い訳を持って堂々と参加ができる、最初は言い訳を作って上げることも大切にしている。
- ② 地域・大人・様々な当事者の方のバリエーションをそろえ、子どもたちに“何”と出会ってほしいのかという想いの共有を図り、大人自身の子どもたちに対する温かいまなざしを育てることもねらっている

事業の成果と今後の課題

子どもと親の中間世代の時期に差しかかる中学生・高校生が様々な地域の方たちと触れ合い遊び関わることで、中学生・高校生の他者に関する関心・福祉やボランティアへの関心を高め、共感能力、情操を豊かに育むことができた。

また、赤ちゃんと触れ合ったときに『癒される』と発言をしたときがあった。思春期特有のモヤモヤした時期に心を開く瞬間が大事と思った。子どもたちが成長し、ライフスタイルが変わっても託児ボランティアや企画をしてくれ、高校生では福祉に興味を持ち、福祉系の大学に進む子も出てきた。6年目だからできる対象者の循環サイクルができつつあるので、今度はママやパパになって遊びに来てくれるような連携と協働の仕組みづくりができればと思う。課題としては、スタッフと場の設定がつどいの広場のように専門的なスタッフを置いてできればと思う。



触れ合い交流託児ボランティア



“赤ちゃんってカワイイネ!!”



ミーティングの様子



自主企画の準備中!



自主企画、大成功!!



大好きな仲間と共に..

執筆者職・氏名：合志市社会福祉協議会

こども支援センター課 児童厚生員 大草理美子

コーディネーターからの一言コメント

中・高校生を事前に把握していること、彼ら自身が企画・発信していること、それらを支援する学校・行政・地域が彼らを理解・育成しようとして連携を密にしていることがとても良い。この世代の居場所づくりは意義が深い。

(橋本 洋光)